「資本論」を読む会便り

No. 1
2015.6.4

たくさんの方にご参加いただきありがとうございます。「都合で1回目は参加できないけど……。」という方もいらっしゃるので, 今後ますます活発な議論を通して資本論を読み進めていく, そのような読む会になろうかと期待しています。

楽しい読む会に向けて　～レポーターから～

第1節の途中で終わりましたので, いろいろご意見はあろうかと思いますが, 次回も担当させて頂きたいと思います。

次回の主な内容は, 前回に続いて商品の分析をさらに続けていきます。前回は, 商品を使用価値の面から分析し, 使用価値は富の社会的形態とかかわりなく, 富の素材であることを確認して, 交換価値の分析(商品の特徴？)に入りました。ここからは一つ一つの商品をいくら眺めて見ても発見できないので商品と商品の関係(交換関係)を見ていきました。そして, まず交換価値のもっともありふれた直接的な現象から分析を始め, 諸商品の交換関係の中から等しい何かがあることまで学習しました。こうしたことを踏まえて, 次回では, 等しいもの(共通なもの)は, 何かを追求し, 明らかにしていきます。共通性発見の旅は, 使用価値の捨象から始まります。すると, 労働生産物という共通性が見えてくるのです。ここから, この労働生産物を徹底的に分析し, 共通性発見の旅はさらに進み, ついに, 抽象的人間労働を発見します。そして, すべての商品は, この抽象的人間労働が対象化されたもの(凝固したもの)であることが明らかになります。みんなでゆっくり, じっくり旅を楽しむことができればと思っています。

第1回のまとめ

報告や話題になったことなどを取り上げます。皆さんの“復習”に役立てば幸です。

なお, 作成者のメモが不十分な点, 私見が混入している点, 文体不統一, などご了解ください。(S)

◆テキスト

全集版(大月), 岩波文庫, 国民文庫, 日経BPクラシックス, 新日本出版, その他いろいろあるようです。新しい訳は, 日本語が読みやすいようです。参考書として, 資本論辞典が紹介されました。

読み進む上での便宜上, 字下げごとに1段落と数えることにします(翻訳は, 多分原著に

従っているだろうから)。注は段落に付属するものとします。

◆資本論の意義

資本論は, 資本主義の社会の次の社会を明らかにしている。

目次を見ると, 資本論でどんなことが取り上げられているか, とりあえず分かる。

現実の社会を分析し, その経済法則をみている。

資本主義の分析 → 資本主義社会の歴史性(死滅すること)を, 現実の分析から明らかにしている。歴史性というのは, 種が芽を出し花を咲かせ, また新しい種を作る, ようなものと言える。

生成→発展→消滅というが, 現実はどうなのか。今, われわれはどこに居るのかが議論になりました。これに関して, 現存「社会主義」は, 商品が存在。故に, 社会主義ではない。との指摘がレポーターからありました。

◆第1部 資本の生産過程　第1編 商品と貨幣　第1章 商品
第1節　商品の二つの要因　使用価値と価値(価値実体　価値量)

【第1段落】「資本主義的生産様式が支配的に行なわれている…。　原注(1) 」

資本主義的生産様式において, 労働生産物は全て商品である。

「社会の富」とあるが, 富というのは人間が作ったもの, 労働生産物一般である。

商品について「巨大な商品の集まり」とあるが, 塊と捉える。「商品の集まり」は物体的である。

商品でないものはなにかあるか。土地は？　という疑問に対し, 土地は売買の対象で, 商品になっているが, これについては地代論を見なければならない, と, レポーターから指摘がありました。。

商品は, 本来, 労働生産物であるが, 資本主義の発展の中であらゆるものが商品となる。あらゆる物の「商品化」がおこっているが, ここでは簡単な「商品」を扱っている。

白樺派の人々は, 土地, 水, 空気は自然の産物, と言っているとの指摘がありました。

「一つの『巨大な商品…』」の「一つの」は, テキストによってあったりなかったりであることも話題になりました。

【第2段落】「商品は, まず第一に, 外的対象であり, その…。　原注(2) 」

「外的対象」。人間の欲望充足の対象である。直接, 間接を問わない。客観的対象である。「外的」とは, 外部にあるということだが, では, 内的対象ってある？ が, 話題になりました。人間の思惟の産物がそうではないか, という発言がありました。

【第3段落】「鉄, 紙などいっさいの有用物は, 二重の観点…。　原注(3) 」

質と量が問題になりました。有用物は, 多くの属性の全体である。有用物でなければ商品にはなり得ない。有用物の量を測る手段は社会的尺度である。慣習で決まる。例えば面積の坪など。

【第4段落】「ある物の有用性は, そのものを使用価値にする…。　　原注(4), (5) 」

有用性とは「役立ち」のことである。物の有用性が, 物を使用価値にする。と言っているのだから, 使用価値とは有用性のことではなく, 鉄, ダイヤモンドなどの商品体そのものである。

使用価値が財をなしている。資本主義においては, 交換価値の素材的な担い手になっている。

使用価値が実現されるのは, その使用・消費によってのみであり, 富の素材的内容をなしている。

物の有用性＝使用価値　ということでは無いようである。

【第5段落】「交換価値は, さしあたり, 一つの種類の使用価値…。　　原注(6), (7) 」

交換価値は, 一つの使用価値と別の使用価値との交換比率として現れる。それは量的であるが, 変動し, 内在的なものはに見えない。

【第6段落】「ある特定の商品, たとえば一クォーターの小麦は, …。」

A商品a量が, X商品x量と交換されることを, A商品a量は, X商品x量という交換価値を持つ, と表現している。

A商品a量が, X商品x量を初め, 様々な交換価値を持つという事実は, 一つのある「価値」の表現である, と言っていると思われます。

【第7段落】「さらに, 二つの商品, たとえば小麦と鉄とをとっ…。」

前段落を引き取って, 交換関係は ○○＝○○　と表される現実から, 「＝」の両辺には共通のある量が含まれていることを見出せる, としている。

ここで議論は, 次の段落の幾何学上の一例にもおよびましたが, 時間が来たので, 一応この段落で終わることになりました。

「資本論を読む会」便り

No. 2
2015.6.30

第2回は参加者が少し少なかったですが, 皆さん, お忙しい方が多いようです。「初回は参加できたけど, 秋まで参加できない。」と, ご連絡を頂いた方もいらっしゃいます。そうした方にも, この「便り」が役立てばと思います。また, 今後, 参加者の皆様に感想など寄せて頂いて, ご紹介したいとも考えています。

第1編, 第1章, 第1節を終わる

第1回では, 商品を使用価値の面から分析し, 次に交換価値の分析に入りました。商品と商品の関係(交換関係)の中に, を見ていきました。そして, まず交換価値のもっともありふれた直接的な現象から分析を始め, 諸商品の交換関係の中に, 等しい何かがあることまで学習しました。

今回はこの続きで, まず, この等しいものは, 労働生産物という共通性であり, ここから抽象的人間労働を見出します。すべての商品の価値は, この抽象的人間労働が対象化されたもの(凝固したもの)であるという結論で, 第1節を終わりました。

第2回のまとめ

※ 全ての議論に触れている訳ではありませんし, 完全な要約にもなっていません。
編集人の復習ノートみたいなものとお考えください。

◆第1部 資本の生産過程　第1編 商品と貨幣　第1章 商品
第1節　商品の二つの要因　使用価値と価値(価値実体　価値量)

【第9段落】「この共通なものは, …。　原注(8)」

この共通なものは, 商品の使用価値ではないので, 使用価値を捨象します。

【第10段落】「使用価値としは, 諸商品は…。」

商品の質的側面を捨象するから, 従って, 量的側面だけが残ります。

【第11段落】「そこで商品体の使用価値を…。」

商品から使用価値を捨象すると, 労働生産物という属性だけが残ります。すると, 労働生産物を作る労働も, 具体的有用労働(机を作る労働, 家を作る労働といった差異)が捨象され, 同じ人間労働 ＝ 抽象的人間労働だけになります。

ここで, サービス業の労働はどうなの？　と, 話題になりましたが, いろいろ考えるとややこしいので, 取り敢えず, マルクスが例に挙げているような商品を作る労働だけを考えることとして, 先に進むことにしました。

【第12段落】「そこで今度はこれらの労働生産物…。」

使用価値を捨象された労働生産物に残っているのは, 「まぼろしのような対象性」だけであり, 抽象的人間労働力の支出の, 凝固物だけです。「それら(労働生産物)に共通な社会的実体の結晶として, これらのものは価値－－商品価値なのである。」

ここで, 「対象性」と言っているのは, 第2段落の「外的対象」と同じく, 人間の思惟の産物とかではなく客観的実在, という意味でしょう。「まぼろしのうような」という形容がついていますが, 商品を見ても直接には見えないという意味でしょう。

レポーターはレジュメに, 河上肇「資本論入門」(第1分冊 p152～153)からの引用を記しています。

「商品生産社会においては, あらゆる労働生産物がその生産者の私有物として対立するけれども, それらのものは相互に交換されることによって, 社会物に転化し, それらのものに費やされた労働はその具体性を捨象されて, 抽象的な・人間的な・労働という等価物に統一される。この統一は労働生産物の商品としての全面的な譲渡によってもたらされる。だから『この統一が発生するのは, 自然からではなく, 社会からである。』というのであり, 具体的な個別的な有用性を捨象された労働は諸商品に共通な『社会的実体』というのである。」

なお, この引用の中で「人間的な」というのは, ヒューマニズムのような意味ではなくて, 「人間による」という意味で, 直後の「労働」を修飾しているものと思われます。

【第13段落】「諸商品の交換関係そのもの…。」

ここは, 商品価値に至るこれまでの展開のまとめのようです。

レポーターは「商品の交換関係または交換価値の内に現れる共通物は, 商品の価値である。」とまとめています。

この段落の後半, 「価値の必然的な表現形式または現象形態としての交換価値」についての考察に再び戻ることを予告していますが, これはこの章の第3節だそうです。

【第14段落】「だから, ある使用価値または…。」

今度は, 価値の大きさを如何にして計るか, の考察に進みます。

それは, 「価値を形成する実体」すなわち労働の量によってであり, それは労働の継続時間で測られること, その単位(度量標準)は1時間とか1日であると, 述べられています。

参加者からの質問に答えて, レポーターから, 1ｔの鉄と1ｔ綿の例を使った説明がありました。「便り」編集人の理解するところでは次のようになります。

鉄と綿を天秤に掛け釣り合うようにします。鉄と綿では外見もかさも随分違いますが釣り合うのですから, それらの中に共通のもの(量)があるはずです。それは重さです。すなわち, 重さが等しいから釣り合うわけです。さて, 重さを計るにには, あるいは表示するには, どうするか。それには, キログラム原器を使います。これが度量標準。もし,

鉄がキログラム原器 1000個と釣り合えば 1000 kg すなわち 1 t というわけです。この鉄と綿が釣り合うのですから, 綿も 1 t になります。
　参加者のみなさん。このような理解で良いでしょうか？

【第15段落】「1商品の価値がその生産中に…。」
　次に, 商品を生産するのに支出された労働の量は労働者(熟練か非熟練か)によって異なる, ことについて検討します。
　商品の価値の実体である抽象的人間労働は, 一様な人間労働の支出である。社会の総労働力は無数の個人的労働から成り立っているが, 同じ人間労働と見なされます。したがって, 個別労働力は社会的平均労働力という性格を持ちます。
　社会的に必要な労働力とは正常な生産条件と, 労働の熟練及び強度の社会的平均度をもって何らかの使用価値の生産に必要な労働の量です。
　この, 平均化される, ということに関して, 生産は社会的生産として行なわれていること, 商品生産が一般的であること, が指摘されました。通常, 同じ商品を複数のメーカーが生産していますが, メーカーによって生産条件は異なるでしょう。AメーカーはBメーカーが生産するよりも労働時間が多いかも知れません。しかし, 同じ商品であり互いに交換可能ですから, 等しい価値を持ちます。A生産者の商品の労働時間がB生産者より多いとしても, A生産者の商品生産についやした労働時間は社会的(全ての生産者の)平均労働時間として, 商品の価値の実体をなしている, ということでしょう。

【第16段落】「だから, ある使用価値の価値量を…。　原注(9), (10), (11)」
　この段落は, 14, 15段落のまとめでしょう。「価値としては, すべての商品は, ただ, 一定の大きさの凝固した労働時間でしかない。」
　この「労働時間」はもちろん, 社会的に必要な労働の量ということです。

【第17段落】「それゆえ, もしある商品の生産に…。　編集者注」
　商品の生産に必要な労働時間が不変なら, その商品の価値も不変。
　その労働時間は, 労働の生産力に変動があれば, そのつど変動。
　労働の生産力は, いろいろな事情で変化するが, 中でも
　　労働者の技能の平均度
　　科学とその技術的応用可能性との発展段階
　　生産過程の社会的結合
　　生産手段の規模および作用能力
　　自然事情
　によって, 規定されている。
とあります。
　この後, 価値変動に関して, ダイヤモンドの例が述べられていますが, 少し話題になりました。「1823年には, ブラジルのダイヤモンド鉱山の過去80年間の総産額は, ブラジルの砂糖またはコーヒーの農場の1年半分の平均生産物の価格にも達していなかったというが, じつはそれよりもずっと多くの労働を, したがってずっと多くの価値を表してい

たにもかかわらず, そうだったのである。」の意味が分かりにくいのです。

この例の主旨は, 豊かな鉱山ではダイヤモンドの価値は下がる, 石炭から簡単にダイヤモンドがつくれるなら価値はもっと下がる, という所にあります。現在では, 装飾用は無理ですが小さなものは人工的に作ることが出来, 爪切りのやすりにもダイヤモンドやすりが付いている, という発言もありました。

ですが引用部分は, ダイヤモンドの産額は砂糖またはコーヒーの価格より低かった, とあるので, ダイヤモンドの価値が小さかった, と読めてしまいます。しかしその直後に実はダイヤモンドの価値は大きかった, とあるので, ？となってしまいました。価格が価値から乖離しているということでしょうが, これはずっと後で論じられる問題です。引っかかることのない例にしてほしかったと思うのは, 編集人だけでしょうか。

【第18段落】「ある物は, 価値ではなくても, …。　　原注E(11a) 」

使用価値ではあっても価値ではないもの挙げた後, 商品生産の条件を述べています。

「商品を生産するためには, 彼は使用価値を生産するだけではなく, 他人のための使用価値, 社会的使用価値を生産しなければならない。」

この後にエンゲルスによる注があり, 「交換」によって他人の手に渡らなければならない, と補足されています。

“参考書”

Sさんから, 「まんがで読破 資本論」「 同 続資本論」(イーストプレス社発行)が紹介されました。お借りして読んでみました。農村の若いチーズ職人が, 投資家の融資を受けてチーズ工場を立ち上げ, いったん成功するものの恐慌に直面して農村に戻る, というストーリーの中に, 商品, ・価値・貨幣・労働力・剰余価値・資本・信用・恐慌・資本主義の矛盾など, 資本論の主要なトピックを挿入しています。もちろん漫画ですから, これを読んで資本論は卒業という訳にはゆきません。編集者も「本書が足がかりとなり, 原書との橋渡しになることを切に願っております。」と書いていますが, その通りだと思います。時間がかかっても, 難渋しても原書(原典。もちろん翻訳)を読破したいものです。

それにしても, 資本論を漫画にするなんて感心するのみです。成功しているかどうかは分かりませんが, 読んだ人がみな資本論を手にすれば成功と言えるでしょう。

※「　同　共産党宣言」もお借りして読みましたが, 結構面白かったです。

「資本論を読む会」便り

No. 3
2015.7.27

第3回はご都合のつかなかった方が重なり, 主催者だけになってしまいました。したがって今回は先に進まず, 第1節で問題になったところ, ならなかったところをもう一度考え, 掘り下げることにしました。今回の「便り」では, 第1節をより深く理解するための参考になるようなものを, 少しばかり集めてみました。

◆商品

資本論は, 商品の分析から始まっていますが, その理由が第1段落で示されています。

資本論を読み進めていく際, 商品と言えば, マルクスが例にあげているような時計・リンネル・鉄, われわれがスーパーで買う米やパンなどを頭に思い浮かべれば良いわけですが, しかし, 資本主義の発展は, あらゆるものを商品化する作用を引き起し, この「読む会」でも議論になった土地などがそれに当たります。これらについては資本論の後の巻で扱われます。われわれが今, 分析の対象としている商品は, 上の例のような「単純な商品」あるいは「単なる商品」ということになります。

ところで, 今, 分析を始めた商品は, 資本論の最初に出てくるので「冒頭商品」と呼ばれていますが, その性格をどう理解するか, 長いあいだ論争が続いてきたそうです。このことに関して, 次の文章を紹介しておきます。

> 「冒頭の商品」の問題は、すでに1894年に「資本論」第3巻が出されたとき以来ずっと論議されてきて、90年の歴史をもつ論争点なのです。まず、ゾンバルト、シュミット、ロリア等に対するエンゲルスの批判があり(第三巻序文等参照)、さらに、すでに1898年にベーム・バヴェルクの「カール・マルクスとその体系の終結」が出版されました。これにはヒルファーディングらの反論がありましたが(いずれも「論争・マルクス主義経済学」法政大学出版局にあります)、こうした国際的な論争をバックに、日本でも、1920年代からブルジョア学者(小泉信三、高田保ら)対マルクス主義者(櫛田民蔵、河上肇ら)の論争や、マルクス主義者間の議論がつづきました。戦後は、これらの対立、論争を"独自の立場から"止揚したという宇野弘蔵(商品＝流通形態 論)が登場し、1958～60年の"新左翼の学生活動家に大きな影響を及ぼしました。／　なぜこんなにも"冒頭の商品"の問題、それがいかなる性格の、いかなる歴史的段階の商品なのかが議論され、論争の的となってきたのでしょうか？／それは、この"冒頭の商品"の理解いかんによって、これにひきつづいて行われる"商品の分析"の意義、そこから引き出される価値法則(価値概念)の意義が全くちがってくるからで、さらには「資本論」の全体(の意義)をどう理解するかに深くかかわっているからです。／　例えば、"冒頭の商品"を資本家的商品と理解するのと、資本

主義以前の歴史的なーー単純商品と理解するのではーー勿論、問題はこのように単純ではなく、だからこそ大きな論争が生まれたのですがーー商品の分析の意義、また「資本論」全体の中におけるその地位が、全然別個になってくるのは見やすい道理でしょう。勿論"冒頭の商品"がいかなる商品なのか、その性格が何かをあらかじめ考えてみることで、"冒頭の商品"の分析がちがってくるわけではありません。ただ、我々が「資本論」から学んでいくうえでの問題意識が尖鋭となってくる(従ってそれだけ我々の理解も深まり、また学習も真剣になる)という限りで、大きな意義を持つにすぎないのです。［林紘義:「資本論学習会 第1期 『資本』の基礎としての『商品』」武三出版会(1989)p19 (注)］

(注) “『資本論』を学ぶために 「資本」の基礎としての「商品」” という書名で新しく編集し直して全国社研社から出版されました(2015年10月)。

◆有用性と使用価値

第4段落の, 有用性と使用価値の関係も, 分かりにくい所でした。ここでは, 使用価値の概念を説明しているわけですが, 使用価値＝物の有用性 ということではなさそうです。

かつて, 大阪市立清水会館で行なわれていた「資本論」学ぶ会に参加したとき頂いた「『資本論』学ぶ会」ニュース No.4 (1997) 」に, 経済学批判と, 資本論初版本とからの引用がありました。その部分を引用しておきます。

『経済学批判』と『資本論』初版

「商品はまず第一に、イギリスの経済学者の言い方で言うと、『生活にとって必要であるか、有用であるか、快適である、なんらかの物』であり、人間の欲求の対象であり、もっとも広い意味での生活手段である。使用価値としての商品のこの定在と、その商品の自然的な、手でつかめるような実在とは一致する。」（『批判』）

「人間の生活にとっての、ある一つの物の有用性は、その物を使用価値にする。われわれは、このことを省略して、たとえば鉄や小麦やダイヤモンドなどのような、有用な物そのもの、または商品体を、使用価値、財貨、物品と呼んでいる。」（初版）

ところで, 「商品体そのものが使用価値である」という言い方に釈然としないものを感じ, 読む会の中でも議論させて頂きました。多分, 言葉の使い方の問題かと思います。

一般的に価値という語は(普通の意味で)

〇〇は価値を持つ。〇〇は価値がある。

という言い方が普通で, 〇〇の性質あるいは属性という扱いです。それを,

〇〇は価値である。

と言うと, 価値は〇〇の属性という扱いではないので, 違和感を感じるのでしょう。

頭の切替えが必要なようです。

◆交換価値と価値

第6, 7段落では, 商品が種々の交換価値を持つことから, 商品に内在する価値を見出しています。河上肇の『資本論入門』が参考になります。堺市立南図書館で行なわれていた「資本論」を読む会の第2回報告(2008年)でも紹介されていました。

かくの如く表現の仕方は版本によって種々の相違があるが、しかし何れにしても内容にさしたる相違はない。それは要するに次のことを意味する。ーーすでに述べたように、商品という以上は孤立して存在するものでなく、必ず他の種々なる商品と種々の割合で交換される。例えば1クォーターの小麦は、あるいは20ポンドの靴墨と交換され、あるいは2エルレの絹と交換され、あるいは半オンスの金、等々と交換されるのであるが、そうすると、その1クォーターの小麦の交換価値は、20ポンドの靴墨であると表現されると同時に、あるいは2エルレの絹であるとも、あるいは半オンスの金、等々であるとも、表現されることになり、かくてｘ量の靴墨、ｙ量の絹、ｚ量の金、等々は、各々分量を異にし且つ甚だしく種類を異にする使用価値であるにも関わらず、1クォーターの小麦の交換価値であるという点では、それらのものが皆な同じだということになる。すなわち吾々が日常の経験において見るところで、理屈でも何でもない。だが吾々はこのことから、交換価値は『かくの如き種々なる表現の仕方と区別されうる或る内容を有たねばならぬ』ということを推理しうるのである。同じものが或いは雲となり雨となり或いは雪となり氷となるというのであれば、これらのものは雲でもなく雨でもなく、すなわちそれ自身とは区別されうるところの、或る内容を有たねばならぬ。かくて吾々は先ず、交換価値なる現象形態と区別されうるところの、或る内容に考え到った。次に吾々は、その内容が何であるかの論究に進む。(『資本論入門』青木文庫第一分冊137～8頁)

◆価値と抽象的人間労働

ここでは,「資本論」学ぶ会ニュース No.6 (1997)の一部分を引用しておきます。

◎「抽象的人間労働」の性格とは？

(一部略)この抽象的人間労働については、昔から一つの論争があります。今、それを紹介して、皆さんにも一度、考えてみて貰いたいと思います。というのは、この論争は、次回から入る第二節にも密接に関連した問題だからです。

その議論と言いますのは、抽象的人間労働の性格についてです。つまり抽象的人間労働というのは、すべての社会のすべての労働について言い得ることであって、その限りでは「超歴史的カテゴリー」だというものと、いやそうではなく、それは商品生産あるいは資本主義的生産に固有の「歴史的なカテゴリー」だという、二つの理解があり、その是非をめぐって論争があったというのです。

『資本論体系』・「商品・貨幣」によりますと、1920～30年代のソビエトで大きな論争があったそうですが、戦前の日本でも河上肇や櫛田民蔵らによって論争されたそうです。その論争を詳しく追うわけには行きませんが、どうやら、河上肇は「歴史的カテゴリー説」をとっていたようです。例えば『資本論入門』青木文庫版の第一分冊には次のような一文がみられます（ただし河上肇は「抽象的」という用語の代わりに「捨象的」という用語を使っていることに注意）。

〈なおここに諸商品に共通な「捨象的な・人間的な・労働」を指して、「社会的実体」と言っているのは、種々なる労働の具体的諸形態の捨象は、それら労働諸生産物の全面的譲渡という社会的過程の産物だからである。……だから一様な人間的労働なるものは、各種生産物の全面的譲渡という社会的過程の産物ーー歴史の行為にもとづく産物ーーに外ならぬのである。〉（153頁）

〈現実的に人間の労働力がいろいろな形態で支出されているということと、それがいろいろな形態で支出されうるものだということとは、これを明白に区別せねば

ならぬ。……現実的に人間の労働がいろいろな形態で支出されるということは、商品生産の発展につれて始めて実現されることである。……かくて吾々は次のことを知る。使用価値を創造するものとしての有用的労働は、最初から如何なる社会状態のもとにも存しうるが、商品価値を創造するものとしての、従ってあらゆる労働の諸形態を代表するものとしての、捨象的な人間的労働は、商品生産の発展に伴うて始めて現実的に存在するものとなるのである。〉（222～3頁）

ところで戦後においては、こうした「歴史的カテゴリー説」が主だったということですが、山本二三丸は「超歴史的カテゴリー説」を主張しているということです。

これも少し紹介しておきましょう。『資本論講座』の第一・二節の原典解説のなかで、山本は次のように書いています。

〈以上の説明によってもあきらかなように、人間の労働は、およそどのような社会にあっても、つねに、具体的有用的労働と抽象的人間的労働との二面から成り立っており、また逆にいえば、この二面から成り立つものこそがはじめて人間の労働であるといえるのである。それゆえ、この労働の二面性があるのは商品生産社会だけであるとか、商品を生産するばあいにのみ労働は二面性をもつのであるとかいったような主張が、まったく誤りであることは、いうまでもない。商品生産社会であろうとなかろうと、およそ人間社会の存するかぎり、人間が必要生産物を生産するために労働するかぎり、つねに人間の労働はこの二面より成り立つものである。では、この二面性にかんして、商品生産社会の本質的特徴は、どこにあるのか？　それは、労働の二面性が商品の二要因、すなわち使用価値および価値として労働生産物＝商品に対象化し、人間にたいして商品自身の自然的属性として、自立した形態をとるという点にある。とくに決定的に重要な意義をもつのは、他の諸社会とちがって、商品生産社会では、抽象的人間的労働が労働生産物に対象化し、凝固した形において、商品自身の価値となり、商品自身の力として、人間に対立するということである。マルクスが、第一章第二節での説明を、「すべての労働は、一面では、生理学的意味での人間的労働力の支出であって、この同等な人間的労働または抽象的人間的労働という属性において、それは商品価値を形成する。すべての労働は、他面では、特殊な、目的を規定された形態での人間的労働力の支出であって、この具体的有用的労働という属性において、それは使用価値を生産する」というパラグラフで結んでいるのは、上にみたように、すべての社会での「すべての労働」の二面性をあきらかにすると同時に、それが商品生産社会では抽象的人間的労働が商品価値を形成し、具体的有用労働が使用価値を生産するという特質をもつものであることをあきらかにしているものであって、まさに「商品で表示される労働の二重性」という第二節の表題の意味を簡潔に要約したものということができるのである。〉（139～40頁）

「資本論を読む会」便り

No. 4
2015.8.20

第4回は新たな参加者もあり, 議論もにぎやかになってきました。今回から, 第2節 商品に表された労働の二重性 に入りました。参加者が増えたとあって, 報告も, 説明の際白板(ホワイトボード)を使ったりするなど, 熱のこもったものとなりました。しかし, 書き方をもう少し工夫すれば良かった, とは, 報告者の弁。

◆第1部 資本の生産過程　第1編 商品と貨幣　第1章 商品
第2節　商品に表される労働の二重性

(編集人の復習ノート)

【第1段落】「最初から商品は, …　　原注(12)」

商品に含まれている労働の二面性の意義について, 詳しく報告がありました。マルクスからエンゲルスへの手紙や, カウツキーの「資本論解説」などの一節が紹介され(詳しくはレジュメ参照), この, 労働の二面性の理解が商品の運動を合理的に理解する鍵であると, 強調されました。このことは資本論のあとの展開で, いろいろなところで出てくるので, 資本論を読み進めて行く上で意識にとどめておくべきこと, と言えるでしょう。

ここで, 商品とは, 使用価値と, 交換価値で決定する価値の, 2つの性格を持つものと言ってよいか？　という質問があったかと思いますが, メモが不十分でどんな話になったか思い出せません。サラリーマンは物を作っているのではない, と言った話も出たように思いますが…。

【第2段落】「二つの商品、…」

リンネル 10エレ ＝W　(価値)
上着 1着　　＝2W

と仮定します。この節の後半(抽象的人間労働のところ)で使います。

【第3段落】「上着は, ある特殊の欲望を…」

有用労働とは

レジュメは, 各段落の主題を1行ほどにまとめてくれています。以下, 各段落のおさらいでも, これを利用します。

有用労働とは, 生産物を使用価値にする労働です。

【第4段落】「上着とリンネルとが, …」

質的に異なる使用価値であることが商品交換の前提　生産物が商品として交換されるのは, 互いに異なる使用価値であることが必要条件, ということです。そして, そのような使用価値を生産する有用労働は, 互いに質的に異なった労働である（上着とリンネルの例で言えば裁縫と織布), と述べられています。

有用労働が多種多様であることを確認して, 次の段落の社会的分業の話につながっていると思われます。

【第5段落】「いろいろに違った使用価値…」

商品生産は社会的分業を前提する

多種多様の商品が存在していることは, それだけ多種多様な有用労働, つまり社会的分業が行なわれていることを意味します。社会的分業は商品生産の必要条件です。

でもそれは, 十分条件ではなく, インドの共同体, 工場内分業などの例が示されました。

そして, 商品を生産する分業は「**自立的な**, **互いに独立の**, **私的労働**」に基づくものであることが強調されました。

【第6段落】「こうして, どの商品の…」

商品生産者の社会では

独立生産者の私事としてお互いに独立に営まれるいろいろな有用労働のこのような質的な相違が, …社会的分業に, 発展するのである。

社会的分業は商品生産社会の前提であるが(第5段落), 商品生産は社会的分業を発展させる, ということのようです。

【第7段落】「ともあれ, 上着にとっては, …」

有用労働の歴史性（永遠の自然必然性である）

ここ重要！との指摘が報告者からありました。

労働(有用労働)は, 人間の, すべての社会状態から独立した存在条件。人間の生活を媒介するための, 永遠の自然必然性である。

というわけだからです。人類初期の労働は, 動物とどれほど違うのか違わないのか分かりませんが, 労働なくして, いろいろな使用価値を作らずして, 人間が生活を続けることができないのは明らかです。

ここで, 労働といっても現在の社会は労働力を売るしかない社会であるという指摘がありました。労働力については, 第2編で学びます。

また, 有用労働に関して, "非有用労働"ってあるのかな？　安倍首相は？　芸術活動とか？　スポーツ選手は？　という質問が出され少し議論になりました。質問の意図は, 有用労働の概念をハッキリさせたいということです。

ある概念を明確にするために対立概念を考えてみるのは有益な方法ですが, 有用労働の対立概念は, 商品の分析の場面では, 抽象的人間労働のように思われます。有用労働は具体的有用労働ですから。商品生産で考えると, 使用価値でなければ商品たり得ないの

で, "非有用労働"の例を探すのは難しいのではと思います。

政治家の活動を労働というかどうかは別として, 物を生産しているわけではないので, 有用労働か否かと考える対象外です。有用労働の"有用"は, その生産物が有用性を持つ, という所に由来します。

芸術など, 非物質的生産についてマルクスは, 剰余価値学説史第1巻で, 生産的労働との関連で「生産全体とくらべれば, とるに足りないものであるから, まったく考慮外におくことができる。」と言っています。精神労働とか, サービス労働とか, どう理解したらよいのか, という問題意識は保持しつつ, 先に進みたいと思います。

【第8段落】「使用価値である上着や…　　原注(13)」

使用価値の2つの要素（商品体は自然素材と労働の結合物）

使用価値を生産するには有用労働だけではなく, 自然素材もまた必要であるというわけです。自動車を製造するには鉄が必要ですが, 鉄鉱石は地中にあります。

【第9段落】「そこで今度は, …」

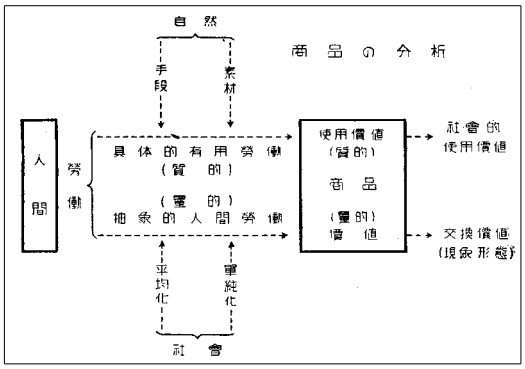
使用対象である限りの商品から商品ー価値に移る。

【第10段落】「われわれの想定によれば, … 原注(14) (15)」

さまざまな種類の労働に共通する「同じ実体」としての「人間労働」

まず, 上着とリンネルは, 価値としては同じ実体を持ったものであり, 同種の労働の客体的表現である, と述べています。

これをもう少し詳しく, 労働の有用的性格を無視するとすれば, 労働に残るものは, それが人間の労働力の支出であることを, 裁縫(上着)と織布(リンネル)の例をもって, 人間の脳や筋肉や神経や手などの生産的支出であると, 説明しています。ある社会状態では, 同じ(一人の)人間が裁縫をしたり布を織ったりする, 資本主義社会では, 裁縫工が織布工になることを余儀なくされることがある, と。



越村信三郎「図解資本論」より

次に, この人間の労働力の支出は, 平均的にだれでも普通の人間が持っている単純な労働力の支出です。複雑(熟練)労働は, 単純な労働の何倍か分と見なされます。なぜかというと, 複雑労働による商品も価値として単純労働による商品と等値されるので, 複雑労働による商品の価値も単純労働の一定量を表しているだけになるからです。

ところで, ある複雑労働の1日の支出が単純労働何日分になるかについては, 一つの社会的過程によって生産者の背後で確定され……, とあって, ここでの問題ではありません。複雑労働については第5章などでも出てきます。

単純労働・複雑労働に関わって, ベトナムでは商品を安く生産することが出来る, 労賃が安い, などの話が出されました。単純な平均労働そのものも国が違い文化段階が違

えば…，とありますから，そういったことを考えねばならないでしょう。また為替レートとの関係もあるという声もありました。低賃金労働や，障害者の賃金の問題も出されました。賃金(労賃)については第6篇で扱われています。また，第3巻でも。

この段落に入ったとき, 報告者は, 難しいわけではない, と言っていましたが, 現実の労働との直接比較はまだ難しいと思います。資本論を読み始めたばかりですから, まだ貨幣も資本も出てきません。

◆「贈与経済」

議論の中で,「贈与経済」について発言がありました。持てる者が持たざる者へ使用価値を分け与えるシステム, ということなのでしょうか。いろいろ説明して頂きましたが, あまりよく分かりませんでした(時間もなかったのですが)。

専門書も置いている書店で探してみましたが, 贈与経済(学)に関する本を見つけられませんでした。ウィキペディア にもありません(英語版には, Gift economy がありましたが)。コトバンク>日本大百科全書に，贈与経済学(grants economics)の項目を見つけました。これらの説明ではよく分かりませんでした。

というわけで, どなたか良い文献をご紹介ください。

◆感想「読書会に参加して」

読書会に参加するのは初めてです。

本を読むのは好きなのですが、いつもはじっくりと意味を考えながら読むということはしていないんだなと気づきました。わからないところも何となく流して読んでしまっています。じっくりと考えて話をしながら読むという経験は初めてで、少し賢くなった気がします。

これまで、一緒に読むから予習してこなくていいよという言葉に甘えて、全く読まずに参加していました。日本語が難しくて、同じことが何度もいろんな表現で出てきたりもして、本に書かれている例もあまりピンとこないし、落ちこぼれぎみです。あ、こういうことか？　とひらめいた！気がしても、つかみきれないまま話が次にいってしまったり、説明を聞いて「あ、なるほど」と思った気がしても、わからなくなってしまったり…。

みなさんが質問をしたり、議論をしている時にも、ちょっとついて行けていない感じです。次こそ！予習をして参加しようと、決心しました。まだ、1段落分くらいしか読めていませんが…。落ちこぼれてしまわないように、がんばりたいと思います。

いつも「資本論を読む会」便りを楽しみにしています。次の会の直前に届くので、「あ、そうそう。もうすぐだ。」「前回はこんな内容だったな」と復習とモチベーションアップに役立っています。(S)

> 分かったつもりが実は分かっていないことが分かり, それでもう一度考え直したり, …。理解はそうやって進むものだと思います。編集人も, この「便り」編集のたびに同じ状況になっています。ですので,「役立っている」と言ってもらえると大変嬉しいです。(編)

「資本論を読む会」便り

No. 5
2015.9.20

今回は抽象的人間労働の理解が主要なテーマでした。
一般的に言って, 本は読み進むに連れて既出の用語が増え, その内容も豊富になってきます。なので, きちんと把握しておかないと理解しづらくなります。また, 長い文(センテンス)は主語・述語の関係, 指示語の内容, 修飾語のかかり具合が分かりにくいことがあります。そんなこともあってか, 質問も多く活発な議論になりました。

◆復習ノート

編集人の復習ノートです。すべての議論を紹介しているわけではありません。段落番号直後の「である」体の文章は主にレジュメからの引用です。便宜上, 本文の字下げごとに段落番号を付けています(大月書店 全集版資本論による)。

第1部 第1編 第1章商品 第2節商品に表される労働の二重性 (続き)

【前回までのまとめ】

第1節と第2節の前半を要領よく報告されましたが, 次のことが特に印象に残りました。
まず, 資本論が商品から始まっていることに関して, 現実的・具体的なものから始めるという唯物論的見地が貫かれている, という点です。
次に, 自然発生的に行なわれる社会的分業は, 商品生産の存立条件であるということです。 ── この分業は, 私的に独立して営まれている, という点が重要だと思われます。
最後に, 価値の実体に関して, 労働から有用労働を捨象するのは恣意的にそうするのではないということです。 ── この捨象は, 現実の社会的過程つまり商品交換そのものがこの捨象を行なっているからです。

【第11段落】「こう言うわけで, …」

労働の同質性のまとめ

価値としての上着やリンネルは単なる同質の労働凝固であり, これらの価値に含まれている労働もただ人間の労働力の支出としてのみ認められる…。

要するに, 裁縫や織布など異なる労働であっても, 価値を作る, あるいは価値に含まれる労働は, 人間の労働力の支出であるという点で同質だ, ということでしょう。労働生産物は(使用価値はいろいろでも)価値として同質である, との発言もありました。
ここで「膠状物」って何？　という質問がありました。版(翻訳)によって訳語が違うようです。全集版では「労働凝固」です。他に「労働凝固体」というのもあります。原語 Arbeitsgallerten の Gallerten は, 膠状物, 膠, ゼリー, ゼラチンの意味です。抽象的人間労働が, 商品の中で固まって価値になっている, というイメージでしょうか。

あと,「価値に含まれている労働」という表現もあるとの指摘がありました。

【第12段落】「しかし, 上着やリンネル…」

商品の価値の大きさと労働の量

上着やリンネルは価値一般であるだけではなく, 特定の大きさの価値である。価値量の相違は, 労働力の支出の量(時間)による。

1着の上着の価値 ＝ 10エレのリンネルの価値 ×2

となるのは, 1着の上着の生産には, 10エレのリンネルの生産の2倍の時間がかかることから生じる。

【第13段落】「つまり, 商品に含まれ…」

使用価値との関連で見た労働では,「どのようにして」「何をするか」が問われ, 価値の大きさ(価値量)との関連でみた労働では,「どれだけ」が問われる。

一商品の価値の大きさは, その商品に含まれている労働の量だけを表しているのだから, 諸商品は, ある一定の割合をなしていれば, つねに等しい大きさの価値でなければならないのである。

「…, 諸商品は, ある一定の割合をなしていれば, つねに等しい大きさの価値でなければならない…。」の意味が議論されました。

上着1着　に対し　リンネル10エレ

では, 価値は等しくありません。これに対し,

上着1着　に対し　リンネル20エレ

という割合, これが「ある一定の割合をなす」であり, このとき価値の大きさが等しい, ということです。

次に, 労働量を労働時間で計ることについて, 同じ商品を生産するにも, 条件によって, また人によって異なるのではという意見がありました。これについては第1節第15段落で, 個々の労働力は社会的平均労働力として作用し価値を形成すると説明されています。

では, その平均は誰がどこで決めるのか, 何かルールがあるのか, ということですが, それは商品交換という現実の中で平均化されます。

【第14段落】「たとえば一着の上着…」

有用労働の生産力の変化と価値量

上着の生産に必要な生産力が変動しない場合, 上着の価値量は変動しない。

すなわち,　上着1着の価値量＝ X労働日。上着2着の価値量＝2X労働日

上着1着の生産に必要な労働が2倍になる　→　上着1着の価値量＝2X労働日

労働が半分になると　→　上着2着の価値量＝ X労働日

この場合, 上着に含まれている有用労働の質の良否は相変わらず同じであるが, 上着の生産に支出された労働量は変化している。

生産力が上昇した場合について, 自動車の価値が減少していることが例として取り上げられ, また, ベテラン労働者が作業に熟練した場合についても議論しました。

今, 上着1着を生産するのに必要な平均的な労働時間を1労働日とします。ある裁縫師が熟練して1労働日に上着2着を作れるようになったとします。しかし, 社会の平均的労働力はほとんど変わらず, 熟練裁縫師の上着1着の価値は1労働日です。したがって, 熟練裁縫師の1労働日が生み出す価値は, 社会の平均的労働力2労働日に換算されるというわけです。しかし, 例えば高速ミシンが普及し, 平均的な裁縫師が1労働日に生産する上着が2着に, つまり労働の生産力が2倍になったとします。この場合は上着1着の価値は0.5労働日に減少します。この段落ではこの後の場合を論じていると理解しました。

【第15段落】「より大きい量の使用価値…」

素材的富の量の増大と価値量との関係

この段落の主眼は次のようなことではないでしょうか。

”生産力の上昇が使用価値総量の生産に必要な労働時間の総計を短縮する場合, 使用価値の量が増大してもその価値量は逆に低下することがあり得る。これは労働の二重性によって生じる。”

こんな例を考えてみました。

① 裁縫師は1人平均, 1日(=8時間)に1着の上着を作っている。

② 裁縫師は全国に1万人いて, 年200日労働している。

とすると,

③ 全国で1年間に生産される上着(使用価値)総量は, 1着×1万×200=200万着

④ その上着の総価値に凝固した労働時間は, 1万×200日=200万日

となります。ここで, 高性能ミシンが全国に普及すると

⑤ 生産力が上昇して, 裁縫師は1人平均, 1日に2着作れるようになった。

ところが, 理由はともかく, 裁縫師は1日に6時間(0.75日)だけ裁縫をし, 残りの2時間は別の仕事をするようになったとかすると,

⑥ 総労働時間が, 0.75×1万×200日=150万日

に短縮されます。すると,

⑦ 全国で1年間の上着の生産量は, 2着×7500×200=300万着に増加するが,

⑧ その上着の総価値に凝固した労働時間は, 7500×200日=150万日に減少する。

つまり, 使用価値の総量が増加したら総価値も増加すると思えるけれど, 条件によっては必ずしもそうではない, という訳です。

ところで, 議論の中で「起こり得る」とはどういう意味か, という質問がありました。そのときは, 労働の二重性からこういう可能性が生まれる, といった説明で終わったかと思います。しかし家に帰って, なぜわざわざこんな仮定の話を持ち出すのか, それが質問の真の意味ではないかと思えてきました。

仮定されているのは, ”生産力の上昇が使用価値総量の生産に必要な労働時間の総計を短縮する場合” ですが, 先の例で言うと, ⑥のようにする理由は何か, ということです。

話を簡単にするために, 上着は紳士もので大人用, 耐用年数は1年とします。またこの国の大人の男子は300万人いて, 上着を買うには十分な収入があるものとします(2着は買

いません)。上記⑤のように生産力が上昇しても, 総労働時間をそのままにすると上着は400万着生産されます。でもこの使用価値を実現できる人は300万人しかいません！ 過剰生産になるのです。

第2編以降で学びますが, 資本主義社会では生産は剰余価値の取得を目的として行なわれます。そのためには商品をますます多く生産しなければなりません。生産力を高める努力もしなければなりません。でも売れない商品を作ってはいけません。その結果は総労働時間の抑制, 価値生産の縮小です。こうしたことが多くの産業で起こり, 相互に影響し合うと, 恐慌として現象します。この現象の根底に労働の二面的性格があるので, ここで述べているのではないかと思われます。

【第16段落】「すべての労働は, 一面では, …　　原注(16)」

商品生産者の社会では

レジュメで, 労働の2面的性格を表にまとめてくれています。最初, ちょっと分かりにくかったですが, 報告者の説明で, なるほどと思いました。

◆「読書会に参加して」

『資本論』は私にとって死ぬまでに読んでおきたい本の一冊であった。このたび誘われるままに「『資本論』を読む会」に参加したが、参加できて本当によかったと感謝している。

古希を迎えて、何も知らない自分、『資本論』をはじめ何も読了していない自分の姿を自覚して恥ずかしくなった。せめて『資本論』の一端でものぞき見して一生を終えたいものだと、メンバーに加えていただいた。

『資本論』は難解である。むつかしい。訳本も読みにくい。変な比較だが、『源氏物語』よりもむつかしいのではないか。読書会に数回参加したくらいでは理解できない。「読む会」の案内文には、「現代社会を基本から理解し、内包する問題を解決するために」『資本論』を読もう、とある。数回参加しただけではその入り口に近づいたとも思えない。

しかしながら会の雰囲気はたいそう好ましいものだ。参加者は数名程度だが、明るい雰囲気で進められる。幼児連れの参加者もあり、初めてお会いした方もあるが、皆親切で熱心である。世話役の方がレジュメを用意してくださり、前回のまとめも作成してくださる。その内容が充実しているので、何か勉強したという充実感はある。私のようななまけ者も委縮することはない。図々しく的外れな発言をしても受け入れてくださる。いい雰囲気で進んでいるので、続けて参加していきたい。

参加を迷っている方々にもお勧めしたい会である。無理のないテンポでゆっくり進むので今からでも間に合うと思う。(M)

「資本論を読む会」便り

No. 6
2015.10.25

暑かった夏もいつの間にか過ぎ, 季節は読書の秋となりました。今回新たな参加者をお迎えし, 「読む会」も軌道に乗ってきたようです。(「便り」編集人はまだまだ難渋していますが。)

さて今回から, マルクス自身が「価値形態に関する1節を別とすれば, 本書を難解だと言って非難することはできないであろう。」(第1版序文) と言っている, その価値形態の節に入りました。一言一句おろそかにせず読み込もうと, 活発な議論となりました。

◆復習ノート

編集人の復習ノート。すべての議論を紹介しているわけではありません。小見出し直後の「である」体の文章は原文やレジュメの引用や要約などです。便宜上, 段落番号を本文の字下げごとに付けています(大月書店 全集版資本論による)。

第1部 第1編 第1章商品

【前回までのまとめ】

<第1節> 商品は使用価値と価値を持つ(商品は使用価値であり価値でもある, とも言う)。価値は商品の交換価値として現れる。価値の実体は抽象的人間労働であり, 価値の大きさは抽象的人間労働の量である。抽象的人間労働とは, 労働の持つ有用的側面(生産物にいろいろな有用性を与える機能=具体的有用労働)を捨象したもので, 頭脳を働かせ筋肉を緊張させ, といった, あらゆる労働に共通な側面を指す。抽象的人間労働の量は, 生産に要した社会的平均労働の時間で測られる。

<第2節> 商品は, 具体的有用労働と抽象的人間労働が, 結実したものである。独立した私的労働による, 社会的分業の生産物が商品となる。

有用労働はすべての社会形態から独立した, 人間の存在条件であり, 自然素材に働きかけて使用価値を生産する。

抽象的人間労働は, 普通の人間の平均的な単純な労働である。資本主義社会の労働者の不断の形態転換(この仕事からあの仕事へ)がこれを示している。複雑労働の量は単純労働の量に換算されるが, 一つの社会的過程によって生産者の背後で確定される。

有用労働の生産力の上昇は, 同じ使用価値の(商品)価値を減少させる。したがって, 生産力の上昇が使用価値総量の生産に必要な労働時間の総計を短縮する場合, 使用価値の量が増大しても, その価値総量は逆に低下することがあり得る。

【第2節 注16】

労働の量による価値量の規定についての, 先駆者の紹介。A.スミスとそれに先行する匿名の著者の引用。また, 英語のworkとlabourの使い分け。(ドイツ語にも, WerkとArbeitがあるけれど, これはどうなのでしょうか?)

第3節 価値形態または交換価値

第3節の目的

「『資本論』における価値形態論の目的は, 商品の価格すなわち貨幣形態の謎を, そしてそれと同時にまた貨幣の謎を解くことにある。ここに貨幣形態の謎というのは, 一般に商品の価値が特殊な一使用価値 ── 金 ── の一定量という形態で表現されることの謎であり, 貨幣の謎というのは, この場合金の使用価値 ── 本来価値の反対物たるもの ── がそのまま一般に価値として妥当することの謎である。」(久留間鮫造「価値形態と交換過程論」p4) すなわち, この節では価値の現象形態=価値形態を解明する。

「反対物」について質問がありました。使用価値と価値のそれぞれの意味の説明があり, 価値の反対物は使用価値だという説明がなされました。「反対物」とは「対立物」のことで, 弁証法の用語だという説明もありました。それはともかく, 価値とは全く別物の使用価値がそのままで価値として現れる(妥当する)謎, と理解して良いと思われます。

なお「反対」の語には「逆」という意味もありますが, 使用価値は価値の「逆」, とは言いにくいので, 「対立物」と言う方が分かりやすいと思います。

【第1段落】

商品は二重の形態を持つ

商品は, 使用対象であると同時に価値の担い手である。よって商品は「二重の形態」を持つ。すなわち, 使用価値の形態と価値形態を持つ。

使用価値の形態は, 商品体そのものであり, 商品の現物形態である。

価値は, いくら商品を見ても見つけることができない内在的なものである。この価値が誰の目にも見えるような形態をとって現象している。この, 価値の現象形態を価値形態という。

ここでは, 目に見えない価値が目に見えるような形を獲得すること, 価値が価値形態として現象する, ということの意味に話が集中しました。なお, 現象という語は通常, 名詞として使われ, 「現象する」のようにサ変動詞として使うことはあまりないので, 少し違和感をもたれた方もいらっしゃったようです。

生産物ができて, その目に見える現物は使用価値の形態であり, それは商品であるための前提だが, まだ価値形態は現れていないと考えてよいかとの質問がありました。それは交換(販売)ためのものであり金何円とすることで価値形態を持ったと言える, ということになったかと思います。「円」は元々, 1871年(明治4年)に1円=金1.5 gと定められたことからも分かるように, 商品の価値を金の一定量で表しています。もっとも, 現在では商品を直接に金(金貨)と交換することはしませんが。

価値と価値形態の関係の説明で, 物体の重さを天秤で測る例え話が出されました。物体をいくらながめてもその重さは見えないけれど, 天秤で分銅と釣り合わせることで, 例えば分銅2個分というように, 物体の重さを表すことができます。

【第2段落】　「商品の価値対象性は, …」

価値は交換関係のなかに現象している

商品は人間労働という同じ社会的な単位の表現であるかぎりでのみ価値対象性を持っている。ゆえに, 商品の価値対象性は純粋に社会的である。したがって, 価値対象性は商品と商品との社会的な関係のうちにのみ現れる。

そこで, 研究は, 価値が現象している形態, 交換関係に戻ることから始める。

価値対象性:　商品の, 価値として客観的実在。商品をいくらながめても発見できないが, 商品そのものに内在している価値は客観的実在で思惟の対象として存在する。

価値物:　目に見えるような形態で(「物」として)現象している価値。

最初に, 交換価値と価値に関して質問と回答がありました(メモ不十分でどんな話になったのか分からなくなりました)。

「価値物」とは価値を持っている物と考えて良い, というような話もでましたが, それだと, レジュメの説明「目に見えるような形態で現象している価値」と, ちょっとずれているような気がします。資本論の文章にも, 商品それ自体は「価値物としては…つかまえようがない」というくだりがあります。だから「価値物」を単に価値を持っている物と解釈すると, 商品も「価値物」ということになり, つかまえられます。その姿・形でもって価値を表している物, ということになるでしょうか…。

商品の価値対象性は「1分子も持っていない」とは, という質問がありました。価値は自然科学的の対象, いわゆる物理的存在ではないということでしょう。

その「対象性」についての議論の中で, 頭の中で, 思考の対象として, ある, 存在する, ものという説明がありました。でも頭の中で考え出したものということではなく, レジュメにあるように, 客観的実在ということです。数の「1」は人間の発明ではなく(数字の「1」は人間の発明), 客観的な存在です。1本の竹は決して2本の竹ではありません。でも1本の竹を割ってもその中から数の1は出てきません(かぐや姫は出てくるかも知れません)。「価値対象性」を「価値という実在」と読み替えてもいいかなと思います。

あと, 「社会的関係」について質問があり, 報告者の説明がありました。

【第3段落】　「諸商品は, それらの使用価値…」

貨幣形態の生成を解明…貨幣の謎も消える

諸商品は一つの共通な価値形態 ── 貨幣形態を持っている。

ここでは貨幣形態の生成を示す。価値表現の発展を最も簡単な関係から貨幣形態に至るまでを研究する。

これによって, 貨幣形態の謎を解き明かす。

＜マルクスが「謎」と言っているのは, 等価形態におかれる商品の自然形態が, そして発展すれば金銀の自然形態が, 直接的な交換可能性とまったく社会的な性質を生まれながらにしてもっているように見える, ということです。＞(久留間「貨幣論」p28)

【第4段落】
2商品の価値関係は, 1つの商品の価値表現でもある。単純な価値関係から始める。

「価値形態の発展は実際にあったのか」という質問がありました。報告者が応えて言うには, 資本主義社会の単純な商品の論理的分析であって, 歴史的分析ではない(歴史的発展を跡づけるものではない)ということでした。

第3節 A　単純な, 個別的な, または偶然的な価値形態

【第1段落】
x量の商品A = y量の商品B　またはx量の商品Aはy量の商品Bに値する。
(20エレのリンネル ＝1着の上着　または20エレのリンネルは1着の上着に値する。)

第3節 A１　価値表現の両極　相対的価値形態と等価形態

【第1段落】
単純な貨幣形態の分析には固有な困難がある

【第2段落】　「ここでは2つの異種の商品AとB, …」
単純な価値形態におけるリンネルと上着の役割
20エレのリンネル ＝1着の上着　(20エレのリンネルは1着の上着に値する)
①リンネルは自分の価値を上着で表している
　上着はリンネルの価値を表す材料である
②リンネルは能動的役割
　上着は受動的役割
③自分の価値を他の1商品で表現している商品　→　相対的価値形態にあると言う
　他の商品の価値表現の材料として役立っている商品　→　等価形態にあると言う

この等式は, 相対的価値形態(リンネル)は上着に換わるということか, という質問があったと思います。ここでは, 上着と交換できるということがリンネルの価値を表している, ということです。等式の後の(　)内の表現が分かりやすいという指摘もありました。
等価形態とは貨幣ではないか, という議論があったかと思いますが, それはこの節の展開が進んでからの話になると思います。
商品Aの相対的価値を表す？　Aの価値を表す？　どの表現がいいのか, という疑問が出されましたが, 報告者から, Aの価値を表す, が正しいと解答がありました。価値の表し方が, 相対的, だと言うわけです。
それで, 相対的の意味が議論になりました。もし, 商品の価値が, 価値の実体である抽象的人間労働の労働時間で表されていれば, “絶対的”と言えるでしょう。しかしそうではなく, 他の商品(使用価値)の分量でもって, 他の商品のもつ価値と等しいとすることで価値量を表しているので, 「相対的」という訳です。
そのほか, 価値と交換価値, 労働, 市場, 労働価値説と均衡論など, いくつかの議論がありましたが, 紙面の都合で割愛します。